



前書き

本作品は企画小説サイト様に参加した際の作品です。

『fish ear』様、ありがとうございました。

携帯サイトの方に同じ作品を載せております。

創作小説サイト [『next』](#)

ああ、確かに覚えがある。私はここへ行ったことがあるわ。

それが彼女の答えだった。

ふたりの子どもを産み育てて一人前にして社会へ送り出す大仕事を終えた女性に相応しい貫禄と疲労とが、彼女の肉体に現れている。

中途半端にパーマをあてた髪、たるんできた輪郭と皺、膝がしらの下がり具合が年齢を意地悪に示していた。服は薄いピンクのセーターに紺のスカートをはいていたが、いかにも安物で近所に出かけるための服らしい。

白黒のものを手先でいじりながら、彼女は大義そうに膝を組み直す。

「無駄かもしれないのに頑張るわねえ。お仕事だからかしら？」

年齢に合った詮索好きがひょっこりと顔を見せる。

「そうですね、仕事ですから」

いや、本心ではそう思っていない。つい、型どおりの返事が口を滑って出てしまった。やはり、彼女はつまらなそうな顔をした。

「ねえ、そんな考えしかしてないの？あなた、まだ若いでしょうに」

あきれた瞳で見つめられては縮こまるしかない。

「人生なんてねえ、あつという間よ。生きがい見つけてしっかり生活しなくちゃ駄目よ。本当にあつという間なんだから」

子どもを育てて中年になった彼女とまだ新米の僕とでは、圧倒的に僕が不利だった。何を言っても若気の至りだとか、経験不足で片づけられてしまう。

部屋の片隅に座っている男が小さい動作で座り直す。遠まわしに誰かと代われと催促されたのかもしれない。確かにこの部屋にこもってから一時間以上も経つというのに、僕はまるで彼女との話を進展させていないのだ。

「聞きたい話があるから呼んだのでしょ？話しなさいな、時間が勿体ないでしょ」

私は暇よ、もう面倒をみる人たちもいないからねえと彼女はカラカラと鳩みたいな笑い声を上げた。

「写真の話ですが、本当に見たことがあるのですね？」

モノクロの写真をつまみ上げて、彼女はじっと意識を集中させているように見える。

「ええ、このパンダを見た覚えがあるのよ。デザインが変わっているし、可愛いなあって思ってね。息子たちが乗りたがって仕方なかったのよ。喧嘩してね、本当に苦労したわ」

「息子さんがお二人いるのですか？」

「そうよお、年の近い兄弟だから喧嘩ばかりするのよ。もう借家の襖を破いたりしてね、散々苦労したわ。あなたは？兄弟はいないの？」

少し躊躇ったあと、僕は真実を話した。彼女には嘘が通用しない気がしたのは、僕がもう向こうのペースに落ちている証拠かもしれない。

「姉がいます」

「そう、お姉さん。いいわねえ、仲良しなのでしょ」

「はい、よく面倒をみてくれました。今はもう嫁にいきましたが」

彼女は満足そうに何度も頷いた。

「私も女の子が欲しかったわ。花嫁衣装を身立ててあげるのなんて夢だったの。息子たちが早く結婚してくれないかしら。そしたらお嫁さんの衣装選びを手伝うつもりよ」

うきうきとした声の調子が、部屋の空気にひどく馴染まない。

また部屋の隅に座っている男がもぞり、と尻を動かした。

僕は写真を手元に引き寄せた。この写真が取られたのは今から四十年以上も昔の話になる。

「この公園で何がありましたか？」

きょとんとした顔が机の向こうから帰って来る。

「だから、息子たちと遊んだんですよ。さっき話したでしょ」

「いつぐらいのお話ですか？」

指を折り、遠い目つきで彼女は時を遡り始める。

「あの子たちがまだ小学校に入ったばかりだから、今から大体二十年前ぐらいの話かしら」

こっそりしつらえた窓からの視線が気になって僕はひとつ咳払いをした。張り詰めた空気が窓を通り抜けて、僕の両肩に押し掛かってくる。

「今はもう、その公園はありません。現在はマンションが建っています」

「あら、そうなの！寂しいわねえ、思い出の場所が減っていくというのは。孫が出来たら連れて行ってあげたかったのに」

心底残念そうに彼女は深いため息をつく。肘をつき、身体を斜めにずらした体勢は馴染みの体勢らしく、彼女の身体の形にぴたりと当てはまっている。

手のひらに汗をかいてきて、僕はズボンで拭い額から流れる汗をそっと拭いた。

「この公園が壊されたのは三十年前なのですよ」

「そんな昔なの？息子たちを確かに連れて行ったはずだけど、私かんちがいしているのかしら？」

公園なんていくらでも同じようなものがあるものね、と彼女は笑う。無邪気な笑顔に僕の心が折れて

しまいそうになる。

「公園の真上に建築されたマンションの一室を購入して、あなたはお子さんと一緒に暮しましたよね？」

「マンション？」

目を丸く見開いた後、彼女は腹を抱えて笑いだした。

「嫌ねえ、そんなセレブな奥さまに見える？私は田舎のボロい一軒家で生活していましたよ。元は借家だったのを、祖父の時から借金支払いでようやく手に入れたぐらい貧乏なんですよ、うちは」

今の彼女の姿はまさしく田舎で見かける女性の服装をしているが、かつてはそうではなかった。きらきら輝く宝石を身にまとっていない時などないぐらいに、全身を飾り立てていた。

けばけばしい服装と濃い化粧を施し、体の至る部位に宝石をつけている女が彼女の中にいた期間が間違いなく存在していたのだ。

「公園は三十年前に無くなり、この写真だけが最後の記録です」

「大げさな言い方するのねえ。最後の記録だなんて、図書館辺りに行けば写真ぐらいあるかもしれないわよ」

まるで僕を慰めるかのような彼女の言い方は、母親の威厳に溢れている。

「いいえ、公園の記録ではなく、旦那さんの最後の記録です。この写真を撮ったのを最後に彼は消えました」

ゆっくりとした動きで、肘をついていた彼女の腕が落ちた。机の上に音もなく腕が置かれる。

「ネズミが」

「え？」

「ネズミが出るのよ。新築だっていうのにおかしいじゃない？しかも子ども部屋には出ないくせに私の部屋ばかり走り回って。本当に迷惑だったわ」

抑揚のない一本調子の話し方に変わり、その変化に僕は寒気がした。

「あんまりうるさいものだから、退治してやろうと思ったのだけどね。でも違ったの。ネズミじゃなかったのよ。仕方なかった、あの人が歩き回っていたのですもの。暗い、重い、冷たい、と叫びながら部屋を徘徊するのよ。もう、うんざりして、私」

指先で机をこすり、その作業に集中することによって別のものを忘れようとしているように感じられる。

部屋の隅に座った男の鉛筆が滑らかに動いていく。

「寝室は夫婦共同だったから、嫌だったけど半分はあの人にあげたわ。でも眠らずにうろうろして、愚痴を言うだけ。ベッドに入ろうとしやしないのよ。意味が分からないわ」

「息子さんたちはその時どうでしたか？」

「子どもには鈍感だからねえ、まるで気付いてなかったのよ。私ばかりが苛々させられて」

彼女の足が彫刻のように動きを止め、机をこする指先だけがせわしなく動く。

「我慢していたのに、耐震疑惑がマンションに持ちあがって、引っ越しする羽目になったのよ。そうよ、新居を探している途中で」

ぬうっと彼女が顔を上げて僕を見る。

「途中だったのに、私はなんでここにいるのかしら？」

底なしの暗い闇が僕を引きずり込もうとする。部屋の隅にいる男が鉛筆を走らせる音だけが現世のものだ。

何故、自分がここに来たのか彼女は一瞬にして記憶から消し去ってしまったようで不審そうな顔をして辺りを見ている。

「もう新居は見つかったはずですよ、娘さんと一緒に暮していたじゃないですか」

「娘？そんなものないわよ。言ったじゃない、息子が二人いるって」

心底おかしいといわんばかりに、笑みを浮かべた。

「本当に生んだのは息子さんですか？」

首をかしげて彼女は不思議そうな表情をする。写真が記憶を呼び覚ますかと思ったが無駄だったようだ。

「マンションは取り壊されました。新しく公園が建設されることになって、工事が始まったんです。そして」

背広の内ポケットに入れていた切り札を僕は出した。出来るなら使いたくなかったが、仕方なかった。

「白骨死体が発見されたんです。鑑定の結果、三十年前に失踪したご主人だと断定されました」

かつて裕福な暮らしをしていた男が無残な白い骨をさらして、写真におさまっている。ありふれた遺体の写真なら、僕も出し惜しむような真似はしない。だが、この写真には異常なものがあつた。

「私の髪の毛、あの人が持っていったのね」

例の一本調子の声が淡々と呟く。力が入らないのか、ゆるゆるとした動きで彼女は頭部に手をやり、一気に引っ張った。

かつらが落ちて、痛々しい禿頭が光の下にさらけ出される。

「あの家に住み始めてから、毎日毎日髪が抜けていくの。でも抜けたはずの髪の毛がどこにもないのよ、枕にもお風呂場にもなくて。私、ずっと探していたの」

白骨死体の右手は茶色の髪の毛を大量に握りしめている。痛んだ様子も風化した様子もない、今そこで抜いたものを握らせたようだと、鑑識の人間が震えながら漏らした。

「死因は撲殺だと思われます、頭蓋骨に裂傷が」

三白眼になり、白眼の部分が増えた彼女がこちらを見ている。僕に対して敵意を持ったのか、と焦った瞬間、彼女が勢いよく立ちあがった。

「もういい加減付きまとうのはやめてよ、あなた！私の髪を奪って、生活までめちゃくちゃにして！私のもうここ何十年以上もろくに眠ってないのよ！気が狂いそうよお！」

あああ、とわめき声を上げて彼女は壁にぶつかっていき、拳を叩きつける。

「あなたがいけないんでしょお！変な女に遺産を渡すなんて言い出すから！私は愛人とちゃんと切れたのに、あなたは許してくれなかったからあ」

涙と鼻水でぐちゃぐちゃになった顔に禿頭の姿は恐ろしいと同時に、ひどく憐憫の情を誘った。

「奥さん、落ち着いて」

皮が裂けて血だらけになっても拳を振り上げるのをやめない彼女に触れようとしたが、突き飛ばされた。

「奥さんなんかじゃないわ！この人は私を捨てようとしたから、だから、だから」

公園で殺して埋めたの。パンダの下で永遠に眠らせてやったのに。真夜中になると毎晩のように私の回りをうろついて嫌がらせに髪の毛を抜いていったのよ。

髪の毛の無い頭を掻き毟り、肌に血が滲んでいく。

「ねえ、どうやったら人間を殺すことが出来るの？この人は死なないのよ、私、思いっきり金属バットで殴り殺したのに！何度も何度もぶって、脈もなくなったのに！私の髪の毛、髪の毛、髪が」

鼓膜が破れそうな声を上げて彼女はその場に泣き崩れた。部屋にある隠し窓から、彼女の子どもが泣いている声が聞こえた気がした。

公園の写真を撮影した後に男は殺されて埋められ、その上にマンションが建てられた。彼女は旦那の死体の上に住み続け、ついに精神に変調をきたした。

「母が変になったのは、この写真が見つかったからなんです。髪の毛が抜け始めたのも同じ頃からで」

目元を赤くしながら、女性は鼻をすする。

「どうしてこんな写真があるんだって叫んでから、母は正常に戻る事がなくなって。私が誰なのか分からないみたいで、いつも他人みたいに挨拶してくるんです。ついには父の愛人だった女だと思いうようになって私に暴力を」

取り調べ室の横の部屋で、彼女の娘が泣いていた。別人のように取り乱した母親の姿はいくら四十を超えた年齢でも、耐えられるものではない。また、気の毒なほどに娘は傷だらけだった。全て母親に殴られたものらしく、長い介護生活の苦勞がうかがえる。

「娘からどうして息子とだと思いうようになったのでしょうか？」

僕は疑問を口にしたが、先輩刑事に一蹴された。

「それは俺たちが解決する問題じゃないだろ。医者領分だ」

口にしながらも、僕にはうっすらと分かるような気がしていた。おそらく、彼女は旦那の愛人を憎むあまりに、女全てを嫌うようになったのではないだろうか。それこそ真相は医者が彼女から聞き出すしかないだろう。

一連の事件を始ませ、また終わりに導いたモノクロ写真が机にある。彼女の娘が写真の中の公園をじっと見つめる。

「でも、この写真は一体だれが現像したのかしら？」

しんと静まりかえった部屋の中で、かさこそと誰かが歩き回る音が響き、ドアから何かが出て行った。

禿頭の女を追うように。

禿頭の女

<http://p.booklog.jp/book/24989>

著者：森山

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/next7/profile>

表紙画像：『fish ear』様からの借り物（無断転載禁止）

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/24989>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/24989>